RIKKYO MOVE
More Valuable Education
立教大学　大学教育開発・支援センター

Newsletter
Center for Development and Support of Higher Education
12

Message

（左）小澤 副センター長、（中央）西原 センター長、（右）原田 副センター長

お知らせ

昨年（2012年）の10月1日付けで、当センターの業務として新たに教育調査が位置づけられ、それに伴う組織改編をおこないました。

新しい組織には、TL（Teaching and Learning）部会と教学IR（Institutional Research）部会の二つの部会が置かれています。

以下に、センター長と副センター長（部会長）からのメッセージをお届けします。

センター長　西原 廉太

（副総長・文学部教授）

立教大学は現在、2016年度から開始する新たな学士課程教育の構築に向けて全学的な検討に取り組んでいます。この新しい学士課程教育カリキュラムのひとつの要点は、「立教ファーストタームプログラム」と仮称する初年次教育の展開です。この「ファーストタームプログラム」では、大学が重視している価値や理念、批判的視点を中心に、大学で学ぶこととはどのようなことなのかを、入学間もない学生たちに理解させ、同時に、アカデミック・スキル、スタディ・スキル（レポートの書き方、プレゼンテーション・スキル、図書館活用法等）を鍛えることが主眼に置かれます。少人数教育をベースとし、今後専門科目を学んでいく上で必要となる知識・技法を少人数で集中的に教育する科目も、このファーストタームの枠組みの中でさらに充実されます。

この中で検討されている内容のほとんどは、実は、大学教育開発・支援センターを中心に、これまでさまざまな形で議論し、実践してきたものと連動しています。センターは、今後ますます、立教大学の教育・研究指導支援の充実のために、貢献していかなければならないと考えています。一人でも多くの教職員のみなさまのご協力を期待しております。

副センター長・TL部会長　小澤 康裕

（経済学部准教授）

TL部会担当の副センター長を務めております。きちんと務まっているかどうかはさておき、センターがこれまで担ってきた学修支援やFD（Faculty Development）に関わる業務をTL部会が引き継いでいます。センター員の先生方の多大なる貢献と学術調査員・職員の献身的な努力で、シンポジウムの開催やMaster of WritingおよびMaster of Presentationの発行等をおこなってきました。今後もワークショップ等の開催を予定しています。ぜひ多くの方にご参加いただきたく存じます。

副センター長・教学IR部会長　原田 久

（副総長・法学部教授）

2012年10月から大学教育開発・支援センターに教学IR部会という新部門が設置されました。ここでいう教学IRとは、大学の教学部門の運営や改革に有益な情報を提供する機能をさしています。現在、IR部会が主として担っているのは学生向けアンケートの実施とその分析です。その分析結果は教育改革推進会議にほぼ毎月報告していますが、同会議の出席者からは「興味深い」という感想をいただいています。しかし、分析結果を使ってもらうのがIR部会のミッションですから、今後は学部との協力のもと、教育改善に有益な情報を“発信していく”予定です。乞うご期待。

「読む」学生が育つ大学教育を求めて
―若者の読書実態と授業実践を始点として―

（2013年6月19日開催）

昨今の大学生の読書離れは、大学関係者だけでなく、社会的にも関心を持って受け止められています。そもそも読むという行為は、専門／教養、正課内／正課外の区別なく、大学での学びを構成する大きな柱の一つです。また読むことを通じて考える習慣は、卒業後、仕事の上でも、私生活の上でも大きな価値を持つと考えられます。

上記の問題関心をもとに、①学生時代の読書の意義を再確認する、②大学教育のなかに「読む」ということをいかに組み入れるか、つまり、大学教育が大学生に読書をうながす必要性について考える、この2つをねらいとしたシンポジウムを開催しました。

第一部では、日本の子どもの読書実態や、初等・中等教育における読書教育の状況について、文字・活字文化推進機構理事長の肥田美代子先生に「読書は書く力、考える力、伝える力を育てる」というタイトルでご講演いただきました。

肥田先生は、初等・中等・高等教育の読む経験をどのようにつなげていくかが課題であると指摘されました。そのためには、教師が読むということの価値・意義を十分に認識すること、さらに児童・生徒・学生を読書へといざなう方法を模索することが重要だと述べられました。

第二部では、学内の授業実践事例として2名の先生にご報告いただきました。

最初に法学部助教の安藤裕介先生より、同学部の基礎文献講読という科目についてお話しいただきました。「古きを読んで

新しきを考える―「基礎文献講読」における取り組み紹介―」というタイトルで、現代に通じる古典を授業で学生に読んでもらい、普遍的な問いの存在を知る機会となっていることが述べられました。

続いて経済学部教授の中島俊克先生より、全学共通カリキュラム総合・領域別B科目の授業実践についてお話しいただきました。「テキストの森への誘い―全カリ領域別B科目を担当して―」というタイトルで、文献を読むことを重視した講義系の科目を2012年度より展開した結果について、各担当者の授業実践を「入門講義」形式、「輪読」形式、「グループ学習」形式に分類し、それぞれの長所や短所を指摘されました。中島先生ご自身の授業での経験も盛り込みつつ、履修学生に単に読ませるのではなく、話すために読む、書くために読むというサイクルを授業の中で工夫していくことが重要であると述べられました。

全体での質疑応答では、司会の図書館長 豊田由貴夫先生（観光学部教授）の進行のもと、今後の大学教育における読書および読むことの位置づけ方や、授業実践上の工夫・課題などについて意見交換することができました。当日は学内外から多くの参加がありました。回収したアンケートからも大多数の皆様より「満足した」との回答をいただきました。今回のシンポジウム開催にあたりまして、ご協力いただきました、すべてのみなさまに感謝申し上げます。

学術調査員　浜島幸司

近日刊行

大学教育開発研究シリーズNo.19
『「読む」学生が育つ大学教育を求めて―若者の読書実態と授業実践を始点として―』

上で報告したシンポジウムの記録冊子を10月上旬に発行する予定です。シンポジウムの詳細を資料とともに掲載いたしますので、ぜひご一読ください。

センター刊行物のご案内

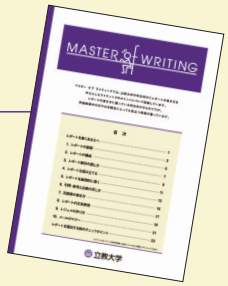
Master of Presentation【準備編】　冊子を作成し、配布しています

立教大学の学生向けに、授業で行うプレゼンテーションの準備のポイントについて解説した冊子「Master of Presentation」を作成しました。発表者は、聴き手に対して、どのようにしたら学修した成果をしっかり伝えることができるのかを意識してまとめたものです。今後、プレゼンテーション直前の準備、質疑応答のマナー、聴き手の心得などについて、コンテンツを作成していく予定です。

目 次

1-1. プレゼンテーションとは
1-2. 準備の流れ
2-1. プレゼンテーションのタイプ
2-2. プレゼンテーションの目的
3-1. テーマを設定する
3-2. アウトラインを作る
4-1. プレゼンテーションの資料（種類と特徴）
4-2. スライド資料の作り方

Master of Writingも一部改訂しました



Master of Writingは、レポートの書き方やレジュメの作り方などを解説した教育・学修ツールです。2012年6月に冊子初版が刊行され、2013年6月に一部改訂をおこないました。入手方法は下の「入手先はこちら」を参照してください。今後も皆様からご意見をいただき、更に利用しやすい冊子となるように改善を目指していきます。

冊子刊行

大学教育開発研究シリーズNo.18『大学院研究指導への誘い（いざな）―海外マニュアルの紹介―』

当センター顧問の寺﨑昌男先生より、本冊子の企画意図と内容紹介につきまして、ご寄稿いただきました。

『大学院研究指導への誘い（いざな）―海外マニュアルの紹介―』刊行にあたって

大学教育開発・支援センター顧問　**寺﨑　昌男**

この内容はいつ活用されるだろうか。冊子を手にしてまず思ったのはそのことである。「海外では大学院指導のマニュアルがいろいろ出ているらしい。収集してみよう」。1年ほど前に気付かされ、手分けして集めてみると、別世界が広がっていた。

大学院生は独自のテーマを持ち、あるいは持つことを期待され、自立した人格として扱われている。教える側は研究指導の専門家でなければならない。その専門性を支える共通の技法もある。加えて、大学院とは「学位を得る」という唯一無二の目標に向かって伸びるコースのようなところだ。院生はそこを走るランナーであり、指導教員はコーチ、ときには伴走者である。ランナーの志（テーマ）は何か、どこかに故障はないか、補うべきドリンクは何かも知っている。ゴールまでの距離はどのくらいかも知悉していて、声掛けを怠らない。

私どもは、7冊のマニュアルを取り上げ、著者・要旨を紹介するとともに、目次は全訳して掲載した。

気づいたことはいくつもある。例えば、アメリカの大学院が制度的に定型化されて、研究指導の手法も共通性が強いのに比べ、イギリスやオーストラリアでは院生の自主選択の度合いが強いらしいことはその一つである。

「大学院共通の指導法なんてありませんよ。同じ専攻でも先生の個性で違いますからね」。これが日本の大学院教員の共通の感想だった。その感想は、研究指導の限りない密室化と並行して、「大学院重点化」の現在も生き延びている。しかし留学生を入れると26万人の大学院生を抱える現在、そのような感想は、不適切であるばかりか社会的には犯罪に近い。本冊子が活用される日が来るのを願うほかはない。

入手先はこちら

刊行物のファイル版（PDF形式）は、下記のセンターホームページからダウンロードできます。
（「立教大学HP」→「教職員向け」→「大学教育開発・支援センター」の順にクリックしてください）
http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/CDSHE/journal/
また、＜Master of Presentation＞冊子、＜Master of Writing＞冊子とリーフレットの現物は、「池袋キャンパス12号館1階」（しょうがい学生支援室前）と「新座キャンパス事務部教務課」で配布しています。ご自由にお取りください。

紫縁談義

教育という人間的営み

教育はサービスであるとしばしば言われ、教育機関はサービス産業であるという言説も日常的に流通している。教育がサービスであるとはどういう意味であろうか。

一つの答えは、学費を対価として、顧客である学生に、彼が望む知識や技能を供与するというものであろう。けれども、サービスが顧客のその時々の要望に速やかに応え、顧客の満足度を高めることを本質とするならば、教育はサービスとしての性質を持っているとは言い難い。

まず、教育は必ずしも学生のその時々のニーズに応える訳ではない。学生が望まなくても、（退屈な）基礎知識は教え込まなければならないし、学生の固定観念は打破しなければならない。また教育の成果は、時には20年後、場合によっては世代を超えて初めて現れる場合もあるし、自覚されるとは限らないから、顧客の満足度という指標で教育をはかることは困難である。それに、そもそも学生は、自分が何を望んでいるのかを知り、それが価値あるものであるかを理解するために、教育を受けるのではないだろうか。

サービスの内容を、知識や技能の（一方的な）供与とすることも自明とは言えない。知識や技能はモノのように授与することができないし、思考法となればなおさらである。しかも教育は、教える側と教えられる側とが、共に学び考えるという本質的に共同的な過程を内に含んでいるのである。

教育について語られる、もう一つの良く似た言説が、教育過程を製品の製造工程としてとらえるものである。この言説によれば、大学は、その時々の社会・企業のニーズに合った学生を効率的に製造しなければならず、良質な学生を社会に供給することができない大学は、粗悪品を生み出す工場が閉鎖に追い込まれるように、市場原理によって淘汰されるべきだという。

サービス産業論よりもさらにナイーヴなこの生産管理論に関しては別の機会に譲るとして、興味深いのは、どちらの場合も、時間の幅をきわめて短くとらえている点である。前者の場合であればサービス終了時の満足度、後者の場合は製品完成時の品質が、評価の基準（基準として成り立ちうるかは別として）なのである。

現在、教育はもっぱらビジネス用語で語られており、そのこと自体がわかりやすさと効率という時間感覚を示している。だが、教育は独自の領域を成す人間的活動である。最大の問題は、教育について語る独自のことばと時間意識を私たちが未だに獲得していないことではないだろうか。

総長　法学部教授
吉岡 知哉（よしおか・ともや）

編集後記

2013年度前期は、「読む」ことをテーマとしたシンポジウムを開催しました。考えること、書くことにつながる、「読み」を大学でどのようにうながしていくのか、今後の課題に向けた貴重な情報共有の場となりました。また、今回は多くの先生方にご寄稿いただきました。先生方の大学教育への思いを感じることができます。忙しい中、ご執筆いただきまして、ありがとうございました。（浜島）

「MOVE 第12号」
立教大学 大学教育開発・支援センター TL部会 ニューズレター
2013年10月1日発行
発行　立教大学 大学教育開発・支援センター TL部会
〒171-8501　東京都豊島区西池袋3-34-1
Tel：03-3985-4623　Fax：03-3985-4615
E-mail：cdshe@grp.rikkyo.ne.jp
http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/CDSHE/